

# 全国保育実践交流連絡会ニユース

2021年8月発行

南埼玉地区

## 川遊びに行きました

めだか保育園の年長さんは毎年夏になると遠くの川に出かけます。バスを仕立てて自然豊かな秩父の山あいの川



に行つて川

柿などの木が木陰を作ってくれています。もう一つ裏庭もあり、幼児組の遊び場所になっています。また、20分ほど歩いたところに見沼田んぼと呼ばれる水田と畑の農地が広がっていて、そこに畑を30坪ほど借りています。年長と年中を中心に、自分たちで植えたい野菜を決めて、種まき、水やり、草取り、収穫をしています。す。ちよつと離れているので子どもたちは頻繁に行けないから、職員と時には近くの畑の人などの手を借りて世話をしています。その畑で今年はスイカを植えて育ててきました。みんなの協力でたくさんスイカがなったので、園内でスイカ割りのできたし、年長が川に持っていました。

めだか保育園の高田園長は今年が就任2年目、36歳の元保護者です。

遊びをするのです。大人のひざぐらいの深さの川でライフジャケットを着けて流れに身を任せてみたり、水辺の生き物を捕まえたり。ひと遊びしたら川岸でスイカを食べました。実はこのスイカ、みんなで苗から育てたスイカなのでそのおいしさもひとしおです。例年ですと現地の施設で合宿するのですが、今年は日帰りになりました。

めだか保育園は埼玉県さいたま市にあります。東京駅から30分弱のJR浦和駅近郊の住宅地に、14年前、社会福祉法人こぐま会の3番目の保育園として開園しました。園庭をL字型に囲む木造2階建ての園舎で68人の子どもが過ごしています。どのクラスも部屋からすぐ庭に出られるようになっていきます。園庭には築山と砂場があり、ケヤキや桜、ビワや



めだか保育園の園舎と園庭

それまでは障子や扉をつくる建具職人として腕を振るっていたので、園長就任は人生の大きな転換点でした。パートナーは生活できればオーケーと背中を押してくれましたが、実母はこぐま会の理事をしていたこともあり、その大変さを知っているの心配しました。でも今は家族みんな応援してくれています。

1年半で運営の流れはわかってきたけれど、保育は素人なので元園長のように子どもにかかわれず、どこまで・どう手を出したらいいのか、その塩梅に迷うといえます。それは保育士であってもさくら・さくらんぼ保育を始めたばかりのころはみんな悩むことです。それでも散歩に付き添ったり、年長の行事をサポートしたり、得意のものづくりの技術を活かして園の修繕をこなす姿を子どもたちに見せてあげたりしています。大変なことに直面しても「自分が受けてきた保育や、自分の子どもたちが受けているこの保育を守りたい。また多くの人に知ってほしい」という思いで乗り越えているという熱意あふれる園長です。

園と保護者との関係についてはやはりコロナの影響をたいへん受けています。例年行っていた公開保育や懇談会はできていません。公開保育は全保護者が集まってリズムを見た後、クラスに分かれて参観し、そして一緒にご飯を食べるという交流の行事です。そうした機会が失われて保護者の顔が見えづらいうことをなんとかしようと、5月からは時間帯や場所を工夫して懇談会を行っています。そのおかげで園と保護者の意思の疎通が少しずつできてきました。しかし（やはり）夏祭り、園庭整備、運動会、バザー、学習会などの園と保護者会が協力して取り組む行事が中止・

縮小となり、その後の楽しみだった親父の飲み会もこれまたできていません。同じクラスでもお互いの顔と名前が一致しないという共に子どもを育てていく環境としてはよくない状況が続いていることを危惧しています。1日も早いコロナの収束を願っています。

そして目下の一番の課題は保育士の育成です。ここところ職員の入

れ替わりが多く、半分弱が1〜3年目の人です。今年の年長担任も3年目、来年、再来年も経験が浅い人が年長担任になりそうで、そうした人たちをどう育てていけばいいのか。めだかの保育士は長い人でも10数年の経験で、その先輩たちは30代・40代の子育て世代が多く、家庭があつて夜の学習会などへの参加が難しく、なかなか後輩の育成ができていないのが現状です。リズムもよくできていなかったのですが、先日元園長に頼んでリズム講習会をやってもらったら大好評で、それ以来リズムが変わってきました。また、年長担任は振り返りでうまくいかなかった点を指摘されてもめげずに進んでいく、やる気のあるがんばり屋です。若い園長を中心に、できることからやっ

ていこうという前向きな姿勢のめだか保育園です。

（聞き手：熊倉洋介／ビヨビヨ保育園）

## 南埼玉地区の近況

### コロナ関連

東京都は4月末以来緊急事態宣言が継続されていますが、南埼玉地区の各園がある埼玉、千葉、神奈川には8月2日に宣言が出されました。今年の4月以降、地区の12園中、職員に陽性者が出た園が1園、保護者に出た園が2園あります。ただしいず

れも濃厚接触者がいなかったため休園にはなりませんでした。感染対策として、テラスでの受け渡しとともに、自主的に職員や保護者にPCR検査や抗原検査を実施している園もあります。職員のワクチン接種はほぼ終了している園とまだはじまったばかりのところに分かれています。ただ、全職員がワクチンを接種したあともマスクをしながらの保育をしています。

### 年長の活動

こうした中、各園の年長クラスは工夫しながら遊びを充実させています。園舎の周りでは虫捕りや畑作業。園外活動として川遊びや海遊びや登山。また半数余りが合宿を行いました。室内での遊びは天の川作り、ちようちん作り、みこし作り、雑巾縫いなどの制作や保育の一部として夏祭りをした園もあります。また、プールはすべての園で実施しています。

ただ、昨年度、園内陽性者が出て休園となってしまった園は、そのときの経験から、園外保育や交流は行わず、行事よりも通常保育の継続を優先するという姿勢をとっています。またバス遠足について保護者から密になることへのクレームがあつて、徒歩遠足に変更したところもあります。

### 職員と保護者

初めての年長担任を周りの職員が支えている園、体調不良の担任に代わってフリーがピンチヒッターになっている園などもあり、職員が一丸となつて年長の保育に向っています。一方、悩みもあるようです。ある園では正規職員と非常勤職員の保育に対する熱意のちがいが壁となっていて、学習会の参加の回数などにも差があり、お互いの不満のもとになっているそうで、園長先生はそれが今一番

の課題だといっています。

また、コロナ対策で保護者とのコミュニケーションが不足していることはどの園でも心配なことのひとつです。門での受け渡しになったら保護者から孤立感を感じると言われ、園内での受け渡しに戻した園もあります。保育参加や懇談会ができた園もありますが、コロナで控えている園も多く、対面ではなくZoomを使って全体会や懇談会をしている園もあります。またある園では4才児クラスのシングルマザーのお母さんが、深刻な病気になるってしまったので、関係機関につなぐとともに保護者仲間と職員で支援しているとのこと

さらに、マスクをしたままの保育を心配する声も多く聞かれます。アタッチメント形成の弱さを克服するうえでマスクが障害になっているのではないかと、言葉の獲得が遅れるのではないかなどです。広木先生が講演で紹介していた明和政子先生のオンライン研修（左図）を視聴した園もありましたが、そこでもマスクのことが話題になっていました。

そのほか、早期教育のこと、父親と母親の育児のバランスのことなど、子育ての悩みについて、アンケートなど意見の聞き方や保護者への伝え方など各園で工夫をしています。

### ヒトの育ちを科学の視点で理解する

～コロナ禍での保育と子育てで大切にしたいこと～

【脳の発達には「感受性期」と呼ばれる環境の影響を大きく受ける特別な時期があります。例えば、視覚情報をつかさどる視覚野は生後6カ月ごろから就学前ごろにかけて環境の影響を受けて発達します。特に乳児は、目や口がダイナミックに動く表情を目にしなが、喜びや怒りなど相手の感情を理解する能力を発達させていきます。】（明和政子先生より）

コロナ禍によって変化した新しい生活環境が子どもたちに与える影響、今必要な子育てと保育のあり方を、わかりやすくお話しして頂きます。

京都大学 明和 政子 先生 講演会